
集え！僕らのエイチアパート！

響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

集え！僕らのエイチアパート！

【Zコード】

Z6818A

【作者名】

響

【あらすじ】

「マジメで個性がない」という理由でエイチアパート 変な人アパート に体験入居（？）することになつた小石川博史。目的は変な入居人たちに触れて個性を学ぶこと。果たして小石川は個性を見つけることができるのか！？

第1話・マジメ代表小石川くん（前書き）

自分でもジャンルがよく分かりません…。
楽しんで読んで頂けたら幸いです。

第1話・マジメ代表小石川くん

「…部長、今なんとおっしゃったのですか。」

「聞いてなかつたのかな…はあ」

「そう言つうと、部長は溜め息をついた。こういつ仕草を女性社員は格好いいと思つのだらう。」

部長とつても、僕の上司 二ノ宮部長 は29歳。社内でも一二を争うやり手だ。

「つまりだね…君は少々マジメすぎるんだよ、小石川くん」

「真面目のどこが悪いんですか。」

「いや、悪いとかじやないんだ。ただ、マジメで普通すぎなんだなあ、うん」

「駄目ですか。」

体が小刻に震えている。部長の中の何かが壊れたようだ。

「あのなあ！君には個性がなさすぎるんだよ…マジで！これからは個性の時代だろ！？俺も部長として評価のしようがないわけ！分かる？」

2、3秒の沈黙。

「すまない…取り乱したようだ。さて、本題に入ろうか

「真面目で個性がないというのが本題ではないのですか。」

「それが違うんだなあ。君には、引っ越しをしてもらつことにしたんだ。」

そう、エイチアパートに！

エイチアパート…Hアパート…

「僕は卑猥なものは好きではありませんが。」

「いや、そんなんじやないんだけど。エイチアパート、正式名称は変な人アパート。名前通り変な人が集まる場所だ。君にはそこで個性を学んでもらう」

そう言いつと部長はカバンから何枚かの紙を出した。

「これが資料。いきなりだが、君は明日から1ヶ月の間、そこで暮らすのだあ！」

「はあ。」

「つ驚け！明日かよ！とか思わないのかあ！？」

「すみません。」

再び部長の中の何かが壊れた。

「…こほん。金は会社の金だから気にしなくていいし、明日ちゃんとトラックが来るからね」

「ありがとうございます。」

急な話だけど、お金のことや準備などは至れり尽せつだ。だから一ノ宮部長は有能なんだと実感した。

しかし、僕には一つ不安なことがあった。

「あの…僕なんかが入つていいのでしょうか。」「大丈夫、話はつけといったから。入居してゐる人も俺の知り合いばかりだし」そこまで言つと部長は優しく笑つた。僕はもう一度お礼を言つて頭を下した。

第2話・奥村先輩、噂好きすぎ。

時計を見る。1時24分だ。

僕は全く寝られない。明日引っ越しすことが不安で仕方ない。これも、先輩が脅すからだ。

回想

『おう、小石川。お前なんで二ノ富部長に呼ばれたん?』

話しかけてきたのは僕より2年年上の、奥村先輩。

『いや、引っ越しをしろと言われたんですよ。』

『もしかして…エイチアパートか?』

奥村先輩がその名前を知っていることが意外だつた。

『知っているんですか。』

『まあな。毎年パツとしない新入社員がターゲットになるんだなあ

…あ、悪い悪い』

『いいです。別に。』

『怒るなよ』

正直、悪いと思ってなんかなさそうだ。

『でもなあ…エイチアパートっていう名前だけ、アパートって言うより寮みたいな感じらしいぞ?』

『え、なんですか。』

資料を見てみると、朝晩の御飯が作ってもらえて、風呂や玄関は共同のようだ。

『いいじゃないですか。独り暮らしでも淋しくなさそうで、健康的ですよ。』

『でも、束縛されてるだろ?それに…』

そう言つと、奥村先輩は声を潜めた。

『俺が入社する前なんだけど、エイチアパートに行つたつきり帰つてこなかつた奴がいるらしい。噂では個性が見つけられなくて解雇

だの処分だのされたとか…』

『え、嘘。』

『つ驚け！』

『すみません。』

回想終了

エイチアパートに行けば、絶対に個性は見つかるのだろうか。正直、僕には自信がない。今まで個性を大切にしようなどとは思つていなかつた。

僕は個性を手にいれて、何か良い方向に行くことが出来るのだろうか。

そんなことを考えていると朝になつていた。

トラックの音がする。荷造りした物が運ばれていく。部屋が、空っぽになつた。

僕は引っ越し屋の人にお礼を言つたために外に出た。

「あなたが、小石川くん？」

後ろに知らない女の人が立つていた。

「はい、そうですが。」「良かつた。人違いならどうしようかと。

私はエイチアパート管理人の林芳子はやし・よしこ。まあ管理人のおばさんね」

「あ、どうも。よろしくお願ひします。」

優しそうなおばさんだ。僕は少し安心した。全く変な人には見えなかつたからだ。

管理さんは僕を車で迎えに来てくれたらしい。変な車ではなくて、本当に普通の車だつたし、運転も普通だつた。

「エイチアパートに、うちの社員が毎年行つているんですよ。」

「ええ。大丈夫よ？ 皆さんと個性を見つけているからね」

不安が読まれていたみたいだ。恥ずかしくなつて僕はうつ向いてしまつた。

第3話・じんにちはエイチアパート

「さあ着いた！ここがエイチアパートよ！」

管理人さんが勢い良く叫ぶ。僕は恐る恐る車のドアを開けた。

そこは、奥村先輩の言つていたとおり、アパートとはほど遠い建物だった。

古ぼけた木材の学校や、町役場といった感じだ。清掃は行き届いているようで、中は意外に広いのかもしれない。

「なかなか凄いですね。」

「いい感じでしょ？」

管理人さんは笑つている。僕はそういう意味で言つた訳ではないのだが。

玄関の戸を開ける。中も木だ。火事が起きたらひとたまりもないだろつ。

「土足禁止だから、そのスリッパに履き替えてね」

そう言つと管理人さんは慣れたように靴を脱ぎ、目の前にあるスリッパに履き替えた。僕もそれを真似して、管理人さんの後を追い正面の部屋に入った。

「祝 小石川くん入居！！」

広い部屋の中に垂れ幕が張つてある。

パアアアーン！

耳元でいきなりクラッカーが鳴らされた。

「…あ、どうも。」

「つ驚け！んもう！」

「すみません。」

髪の短い、活発そうな女人が笑つている。

「何か想像以上だなあ…。私は七護みすず（なご・みすず）。これ

からよろしくね！」

「小石川博史です。よろしくお願ひします。」

「あははー語尾にマルとかー・マジメっ子ー！」

なんだか悲しくなった。

「気にしないで下さいね。みすずさんは悪気があるわけじゃないので」そう言ったのは、髪がふわりと巻いてあるおとなしそうな女人だった。いかにもお嬢さんという感じだ。

「ありがとうございます。ええと……」

「九条京です。よろしくお願ひしますね、小石川さん」

九条さんは優しく笑つた。暖かい笑顔だった。

「いらっしゃりそよろしくお願ひします。」

僕はまた少し安心した。

「さあ、たくさん食べてね」

管理人さんが料理を運んでくる。椅子も沢山あるし、ここは食堂のようだ。

「いきなりごめんね。皆が歓迎会しようつて。荷物は運んでおいたから、食べ終つたら一階の6号室に行ってね

「わざわざすみません。」

ここのは住人は皆いい人みたいだ。全く変ではない。エイチアパートとは、名前だけなんだろうか。

「ここにいる2人で全員ですか。」

「まだいるよー、『飯にはこないけど

「誘つたんですけどね…。お部屋にいるみたいですね」

僕は口の中の御飯を飲み込んで言った。

「あの…僕、挨拶に行つてきます。」

「あら、そう?ならついでにご飯持つていってもらえるかしら

「良いですよ。」

お盆に乗つた御飯を受けとる。

「1号室だからよろしくね~」

皆が僕に手を振っている。なんとなく利用されたような気もしたが、分からぬふりをしておいた。

1号室の前に行く。殺氣の様なものが感じられる。躊躇ためらいながら、僕は扉を叩いた。

第4話：一志とユイチアパートの秘密（前）

「失礼します。」

扉を叩いて部屋に入ると、一人の男性が僕に背を向けてパソコンをしていた。

「初めまして。小石川博史とります。食事を持つて来ました。」
背中に話しかけると、その男性が椅子を回転させてこちらを向いた。

「キミが新しい入居者か」

にっこりと優しい笑顔を浮かべている。

僕は、驚いた。

何故なら

その男性は、僕が良く知っている人物だつたからだ。

「……」ノ富部長。何故ここにいるのですか。」

「……ええ？」

眼鏡を掛け、いつものスーツではない黒い服を着ていたが、それは確かに二ノ富部長だつた。

「……あー、なるほど。アイツもつ部長になつたんだ。早いね。」

「おつしゃつている意味が分からぬのですが。」

「混乱しているキミに自己紹介をしてあげよう。ちなみにオレは二ノ富部長じゃないよ」

本当に混乱してしまつた。二ノ富部長と同じ容貌の人物が、自らをそうではないと言つてゐる。一体、この人物は誰なのだろうか。

「オレの名前は二ノ富一志。キミの二ノ富部長の双子の兄貴なのだ！」

「……はあ。」

「つ驚け！」

「すみません。充分、驚いています。」

双子にしても良く似ている。しかし、本當かよと愚痴を言っている姿を見ると、確かに二ノ富部長ではないなと思った。

二ノ富さんはやっと僕の持つてきた御飯を食べ始めた。忙しく口に物を放り込んでいる。

「ろう? 二郎は元ふい?」

「はい。元気ですよ。」

二郎とこつのは二ノ富部長のことだと解釈した。

「二ノ富さんは部長に会つていらないんですか。」

「一志でいいよ。会つてないな… どんぐらーにかも覚えてない

「曖昧ですね。」

「しょーがないよ、オレ引きこもりだし」

「引き…こもり…。」

急いで部屋の中を見渡す。ちゃんと掃除されていて清潔そうだ。

志さんを見ても髪も格好もきちんとしている。

「とても引きこもりには見えませんが。」

「なに? フィギアとポスターがいっぱいあって終始『萌え~』とか言つてるとと思つたわけ?」

「…はい。」

「小石川は正直者だよねー」

何故かわしわしと頭を撫でてくれた。

「でもかれこれ7年ぐらいになるかなあ。外界に出てないの」

「ならどうやって生活してるんですか。」

「そう聞くと一志さんは自慢気にパソコンを撫でた。

「今はITの時代だろ? 大抵の物はコインで注文すりやいいし、飯はここ^{たいてい}の食堂でえる。髪は京ちゃんが切つてくれるし。金だつてネット上の株式で儲けてるもんね~」

停電になつたり周囲の人々に見捨てられたらこの人は確実に死ぬなと思つた。

第5話・一志とエイチアパートの秘密（後）

「おや？ 面食らってるなあ、小石川」

「一志さんはいかにもエイチアパートの住人という感じですね。」
「そう言うと一志さんは不思議そうな顔をした。

「ミンナイかにもつて感じじゃん」

「いや、皆さん普通ですよ。エイチアパートについては名前だけなのですかね。」

一志さんは少し考えてからニヤリと笑った。

「ミンナ猫かぶつてんな？ よし、小石川について」

「一志さんにぐいぐいと腕を引っ張られる。何事か僕は困惑してしまう。

「何処に行くんですか。外ですか。」

「んなわけねーだろつ！ まずはみすすサンのとこかなあ」

引っ張られすぎて腕が抜けそうだ。急いで部屋の外に出た。

「みーすすサン！」

早くも七護さんの部屋の前にいる。この人は何をするつもりなんだ
る？

「つるさいよー！ …あら？ 一志くんに小石川くん。どーかした？」

七護さんはいきなりにもかかわらず笑顔で扉を開けてくれた。

「小石川を紹介みたいなー。入れてよ

「はいはい」

「お、お邪魔します。」

部屋に入つて驚いた。棚や机の上に置かれた沢山の写真立て。しかも写真は皆幼稚園児だ。

「…」これはなんでしょう。

「私、幼稚園の先生なの」

それならおかしくない。卒園した生徒の写真だらつ。

「なーに澄ましてんの？お氣に入りの子なんでしょ、ショタハンセん」

… しゃたこん。

「クソ真面目くんにはわからないからしごぞ」

「じゃあ説明しようかなあ」

苦笑いでみすずさん（と呼べと言われた）が説明してくれたのは「

れだ。

ショタハン…正太郎ハンフレッシュを略したこの言葉は、

「お姉さんが幼い男の子を愛する」

」とを意味する。

これは鉄人28号に出てくる正太郎君に由来する。

「あ、幼稚園の先生になつたのはそんな理由じゃないからね！みんな可愛いけど」

「でも33にもなつて結婚しないのはそんな理由でしょー」

「志くんはつるわいっ！」

「ええと… 33歳には見えませんよ。」

「…あー もう小石川くんが悪い使つてんじやん…」

部屋を出ると一志さんは肩を叩いて言った。

「なつ変だろ？」

「…まあ。」

みすずさんがあんな人だつたなんて…。僕は手の甲で額の汗を拭つた。

一志さんはそんな僕に見向きもせず、みすずさんの隣の部屋をノックした。

「早くしろー！次は京ちゃんだつ」

「九条さんも変なんですか。」

「当たり前だろ？がつ…」」」」はハイチャーパートだぞ…」

ぐつたりしている僕を見て、一志さんは嬉しそうだった。

九条さんの部屋は綺麗で、良い匂いがした。見る限り奇妙なところはない。

「紅茶をどうぞ。クッキーもありますよ」

温かな紅茶は僕の気持ちを落ち着かせた。クッキーはびつやけ手作りのようだ。

ふと、手付かずのカップがあることに気が付いた。3人しかいないのに紅茶は4つあった。

「九条さんは料理がお上手なんですね。」

「まあ、ありがとうございます。それに小石川さん、京でいいですよ。名字では間違えやすいですから」

ふんわりと笑顔で返されたが、僕には意味が分からなかつた。何故間違えやすいのだろう。

「ほら京ちゃん、紹介してないじやん」

一志さんが言うと、九条さんは慌てて僕に頭を下げた。

「そうですね、ごめんなさい！紹介します。私の弟の京介です」

主のいない紅茶を示しながら、九条さんが笑つた。

「弟の…京介さん…。」

僕は何もない空間を見つめて言った。京さんは嬉しそうに僕を見ている。

「仲良くしてあげてくださいね。あまり友達のいない子ですから」

「…はあ。」

呆然としている僕の背中を、一志さんが勢いよく叩いた。

「さあそろそろ行くか小石川。京ちゃん！」そーさま

そのまま足早に部屋から連れ出された。京さんはのんびりと手を振つている。

「…どうこう…ですか。」

「いじつことじだつ。京ちゃんには見えない弟がいるの…。」

一志さんはにやにやしながら眼鏡を上げた。

「だから猫かぶつてゐるって言つたる？」

「あ。…もしかして、管理人さんですか。」

「ヨシコ？もちろん！明日の朝分かるさ」

一志さんはそこで分かれた。鼻唄を歌いながら階段を下りている。その姿を見ると妙に疲れてしまった。重い体を引きずりながら、僕は6号室に入った。

翌朝。

朝食を食べようと食堂に入る。味噌汁の香りと共に、それを配る管理人の姿が目にに入った。

髪は立て巻き、服はきらびやかなドレス。ヨーロッパのお姫様のような扮装をしている。

これは、最近よく聞くコスプレというものか。管理人の変な所とはこれが。一瞬で理解してしまった。

先に来ていた一志さんと目があつ。予想通りにやにやと嬉しそうだ。やはり一志はエイチアパートだ…。僕は溜め息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6818a/>

集え！僕らのエイチアパート！

2010年12月21日02時33分発行